

流出厳禁♡ 牛柄ビキニで二人だけのイメージビデオ撮影♡

晴れて小雪のマネージャーとなったあなたの最初の仕事は、彼女への依頼を選別することだった。

元々高身長モデルとして活動していた彼女には、ファッション雑誌からのオファーが絶えない。まだ大学生である彼女がすべての依頼を引き受けるには無理があった。報酬と内容を鑑みて、小雪に相応しい仕事だけを選ぶ必要がある。

悩ましいのはグラビアの仕事だった。1件引き受けてしまい、それが爆発的なヒットを記録したせいで、今では9割の依頼がそれになっている。本人はそういう目で見られるのも嫌いではない——むしろ雄の性欲をかわいいとすら思っているようだが、恋人としては複雑である。

あなたは山のように送られてくる依頼に頭を悩ませていた。

「イメージビデオのお仕事も来てるんだ～。すごいね1本で1000万って。お兄ちゃんのこと3年は養えちゃうよ」

小雪があなたの後頭部におっぱいを押しつけながら、PCの画面を覗いてきた。柔らかな乳肉の感触はどんな高級枕よりも気持ちいい。

「受けるか悩んでるの？」

本来であればこのような依頼は受けないのだが、額が額だけに踏ん切りがつかないのだ。何より専属マネージャーとはいえ、半分居候の身。自分勝手な理由——恋人の肌を他の雄には極力見られたくないという理由で、この依頼を無碍にするのも難しい。しかし、指定された衣装もまた問題で——。

自分一人で堂々巡りの検討を続けても結論は出ない。自分の心情をすべて小雪に打ち明けた。1000万と自分のワガママな独占欲を天秤にかけているのだと。

「え～♡ そんなことで悩んでたんだあ♡ 確かにお兄ちゃんとは私と同じくらい独占欲が強いもんね♡ でもでも、独占欲の形って色々あるんだよ？ お兄ちゃんが気づいていないだけでもしたら——ふふっ♡」

「試しに二人で撮ってみようか♡ イメージビデオ♡」

そんなこんなでイメージビデオ撮影の真似事をする事になった。
どうせやるなら依頼と同じ条件——つまり指定された衣装を使用することにした。

「どうかな？ 牛柄ビキニ、似合ってる？」

似合っているというレベルの話ではない。牛柄ビキニは小雪のために作られたのではないかと錯覚するほど馴染んでいた。

乳肉に食い込むビキニ、安産型のデカ尻に、挟むだけで人を死に至らしめられるようなむちむちの太もも、それでいてお腹は薄くクビレは細い。

それなら凡百のグラドルでも存在するだろう。しかし、身長198cmバストサイズ145cmというスペックがすべてを破壊している。本来であれば通常サイズのビキニがマイクロビキニになってしまっていた。両乳で20kgはある乳を支えてくれているが、ギチギチと悲鳴を上げていて、今にも千切れそうになっていた。そして小雪の乳輪は全くと言っていいほど隠せていない。元々彼女の乳輪は大きめのぷっくりパフィーニップルだが、乳頭の部分を覆うので精一杯だ。

相対的に面積が小さくなっているのはパンツも同じだ。申し訳ばかりの三角が必要最小限だけ隠している。見かけ上は全年齢対象だが、パンツがマン肉に食い込んでいるせいで、むしろ全裸よりもドスケベになっている。おまけに後ろもTバックで、着衣と全裸の違いが分からないほどだ。小雪が尻たぶを広げて見せると、アナルの皺がハミ出してしまっている。

マイクロビキニの極小布面積とは対照に、ニーハイソックスと肘の上まであるロンググローブばかりが大陸のような布面積を誇っていた。そこを布で隠して何になるのか。雄の情欲を掻き立てるためだけの布地が、小雪の四肢を牛柄に飾り立てている。

いずれもスベスベの手触りで、そこにローションを垂らしてしまえば搾精をするための道具と化してしまうだろう。小雪がそれに気づいたら終わりだ。いわゆるローションストッキングやローションガーゼと呼ばれる手法で、あなたの肉竿を限界まで追い詰めて可愛がられることになる。

小雪はあなたのそんな欲望をすべて見通しているようで、「後でしようね♡」と囁いてくるのだ。この女はどこまでもあなたに都合が良すぎる。あなたを逃がさないために、たっぷりと甘やかしてくれる。果たして彼女をイメージビデオに出演させてもよいものだろうか。あなたはスマホのカメラを小雪に向けた。

「バランスボールって意外と難しいんだねえ♡」

たぱっ♡ たゆっ♡ たぱぱっ♡ どたぶん♡

小雪が楽しげにバランスボールで跳ねていた。身体全体が跳ねるということは、それに合わせて乳肉も自由に跳ね回るとのことだ。

「んっ……♡ ふっ♡ ふうっ……♡ んっ……♡」

あなたは何度もその光景を見たことがある。自分の上に乗って身体を跳ねさせる小雪に何度も搾り取られた。肉食獣のような瞳であなたを見下ろし、あなたを空っぽにするために腰を振り続ける。

腰を前後にグラインドさせる風俗嬢さながらの動きを見せたかと思えば、背面騎乗位で重く太い安産型のデカ尻をあなたの腰に叩きつけた。

身体の大きな小雪は、小さなあなたをその身体で押しつぶすのが趣味らしい。彼女が最も好む体位が騎乗位だった。何度も身体に教え込まれた快楽の記憶に抵抗する術はない。

「お兄ちゃん早すぎだよ～♡ ちょっと跳ねたくらいでもうそんなになっちゃったの？」

カメラマンはものの数十秒で使い物にならなくなってしまった。ズボンをギチギチと押し上げる股間に、前屈みになってしまう。撮影など放り出して今すぐ小雪の身体に抱きつきたい。

小雪はバランスボールで跳ねながら、あなたの前まで来た。小雪の身体が大きすぎるため、バランスボールに乗っていると、あなたが少し屈むだけでキスできてしまう。国宝級の美少女の顔があなたの目前まで迫ってきた。彼女の顔ならどんな業界に行っても成功していただろう。1000万人に1人の魔性の美と、圧倒的なフィジカル。近づかれるだけでこの生物には勝てないのだと心底理解させられるのだ。

「ん～？♡ 健全なイメージビデオの撮影なのに、何でこんなになってるのかなあ♡」

背の高い小雪を上から見下ろすことはほとんどない。だからこそ彼女のニヤニヤと挑発するような上目遣いは効くのだ。年下特有の幼さと、身体の発達具合のアンバランスさ。それが肉竿をイラつかせる。

小雪はそれを慰めるように、スベスベのグローブでズボンの上からあなたの肉竿を撫で回していた。小雪の吐息にも熱が混じっている。あなたの性欲で脂ぎった視線に子宮を疼かせているのだろう。

しかし、あくまでも健全なイメージビデオの撮影という建前があるのだ。お互いにその一線は越えないように駆け引きをしている。

「依頼に書かれてたアレやろうよ♡ 目隠ししてお口で何を舐めているか当てるやつ♡」

シルクのアイマスクで小雪は目を隠し、バランスボールから降りて床に座り込んだ。

ペタンと座っている小雪はそれだけで絵になる。何十万何百万もするような高級ドールの佇まいがあった。

今ならこの最高級美少女に何をしてもバレることはない。男の子の理想が詰まった身体を好き放題にできるのだ。

あなたは棒キャンディを持ってきて、小雪の柔らかな頬にあてがった。

「やあん♡ 何これえ♡」

棒状のものをぐりぐりと押しつけられるその様は、一見すると健全な映像だが、少年たちの目には行為の暗喩にしか見えないだろう。この映像が流出すれば「あの夢枕小雪の顔に自分のものを押しつけている」という妄想が何万回も繰り返されることだろう。

「味を確認するね～♡ んえあ～……♡ れえろれえろ♡ れろれろれろれろ♡」

小雪は舌をゆっくりと回して、棒キャンディを味わい尽くしている。そのねっとりとした舌遣いをあなたは何度も味わったことがあった。そこに腰を突き出せば気持ち良くなれることを頭より先に身体が覚えてしまっている。

「ん～……♡ 甘くて美味しいね♡ はぷ♡ じゅろろろろ♡ じゅ～っぽ♡ じゅ～っぽ♡ じゅ～っぽ♡ じゅ～っぽ♡ ずるるるる……♡」

小雪は頬をへこませてキャンディに吸い付いている。鼻の下は伸びて、せっかくの美少女顔がドスケベに歪んでいた。

小雪があなただけに見せてくれるドスケベ本性。あなたは小雪が自分のものになったことを改めて実感した。そして同時にあなただけが見られるこの景色を自慢したいと思った。

少年がTCGのレアカードを友達に自慢して優越感に浸るように、あなたも夢枕小雪の身体をみんなに見せたいのだ。この身体で気持ちよくなっていいのは自分だけ、みんなはそれを眺めて悔しがってはいればいい。

そういう浅ましい欲望すら小雪は受け止めてくれる。むしろ自分の価値を利用されることに興奮するドスケベ女なのだ。

あなたは小雪に気づかれぬようこっそりとファスナーを下ろし、肉竿を取り出した。

「ぶばあ……♡ あ〜ん♡ キャンディなくなっちゃった♡ 早く次のちょ〜だい♡」

小雪は口をぽっかりと開けて、その長い舌を見せつけてくる。そして腋を見せつけるように手を頭の後ろで組んでいた。

あなたは肉竿を口に触れさせるより先に、彼女の鼻先に擦りつけた。

「すんすんっ♡ くっさ♡ これ何だろお♡ お肉みたいな匂いとチーズみたいな匂いがするねえ♡ すんすんっ♡ すーっ♡ はーっ♡ くっっっさあ♡ 臭いのにくせになっちゃう♡」

肉竿のイラつきに我慢汁が止まらない。溢れたそれを小雪の綺麗な鼻に塗りたい。小雪はそれを嫌がるどころか、「やんやん♡」と言うだけで全く抵抗しない。それどころか自分から鼻を擦りつけに来る始末だ。

「ぶはあ〜〜〜……♡」

小雪の熱い吐息が肉竿に何度も吹きかけられた。挑発するような態度にあなたははいよいよ我慢できなくなって、柔らかく分厚い舌肉に肉竿を擦りつける。

「んれえ〜〜〜……♡ やっと来たあ♡ んべえ……♡ れろれろれろれろ♡ しょっぱくて美味しい♡ キャンディより好きかも……♡」

ザラついた舌肉の感触にあなたは思わず声を出しそうになる。

「れえろれえろれろれろれろ♡ これ啜えちゃってもいい？♡ さっきみたいにしたら、これの正体分かるかも♡」

小雪はあなたの許可を得る前にあなたの肉竿を根元までぐっぽり啜え込んだ。

「はぶ♡ じゅうううう♡ ずろろろ♡ じゅっぽ♡ じゅっぽ♡ じゅっぽ♡ じゅっぽ♡」

小雪は肉竿に吸い付いて離れない。キャンディを啜っていた時よりも頬がべっこりとへこんでいる。柔らかな頬肉がカリ首に吸い付いて、ぞりぞりと擦り上げていた。

腰が砕けて、小雪の肩を掴まないと立ってられない。

「ぶっぽ♡ ぶっぽ♡ ぶっぽ♡ ぶっぽ♡ ずぞぞぞ……♡」

鼻の下を伸ばす下品なバキュームフェラはどんどん激しさを増していく。もう健全なイメージビデオという建前などどうでもよかった。あなたの肉竿を貪り食う獰猛な肉食獣が一匹いるだけだ。

そのフェラチオの激しさに耐えかねたのか、元々ゴム紐が緩かったのか。アイマスクがポロリと落ちてしまった。

小雪の隠されていた表情が露わになる。目を細めてうっとりとしつつも、口元だけは窄められて、精液を搾り取るために特化している。あまりにも顔が「まんこ」だった。

あの最高級美少女があなたの前だけで見せるドスケベポルノスマイル。

「あ〜……♡ 見られちゃったあ♡」

あなたの理性はその一言だけで崩壊した。

あなたは小雪の名前を呼びながら何度も腰を突き出す。もはやあなたに余裕などなかった。へっぴり腰のまま小雪の頭にしがみついて腰を振り続ける。

彼女の身体にもたれかかっている無様な姿だが、彼女はそれをしっかり受け止めてくれる。身体の大きい小雪にとっては、あなたのイラマチオなどは子どもが戯れているのに等しい。

「おごっ♡ んごっ♡ ごっ♡ おゝっ♡ ごっ♡ ごっ♡ ごっ♡ じゅるるる♡ んぽ♡ んぽ♡ んぽ♡ んぽ♡」

小雪はあなた金玉を優しく揉んで射精を促す。母のような愛情と、高級娼婦のようなテクニック——小雪はあなたをお世話する聖母であり、同時にあなただけのドスケベ娼婦なのだ。

「だしていいよお♡ ママのおくちでお漏らししよ♡ ずるるるる……♡ じゅるるる……♡ ぐっぽ♡ ぐっぽ♡ ぐっぽ♡ ぐっぽ♡ じゅううううう♡♡♡♡」

どぴゆるるるるるる～♡♡♡

おしっこのように精液が溢れ出す。何十秒経っても止まらない。一番奥まで肉竿をねじ込むが、小雪はそれを平然と受け止め飲み干した。

「ごきゅっ♡ ごきゅっ♡ ごきゅっ♡ ごきゅっ♡ んはあ……♡ いっぱい出せてえらいね～♡」

身体に力が入らなくなったあなたはその場で倒れ込み、小雪のおっぱいに頭を預けた。小雪はその頭を愛おしそうに何度も撫でる。

「イメージビデオ撮影って楽しいね♡ またやりたいな♡」

「依頼もお兄ちゃんがイタズラしてくれるなら受けてもいいよ♡ ズリネタモデル彼女をみんなの前で犯してたっぷり優越感に浸りたい♡ そうだよね？♡」

夢枕小雪は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、そう誘うのだった。